

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：33917

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25870876

研究課題名(和文)中国近代の学校教育における儒学の普及と継承に関する基礎的研究

研究課題名(英文)The Spread of Confucianism in Modern Chinese Education.

研究代表者

宮原 佳昭(MIYAHARA, Yoshiaki)

南山大学・外国語学部・講師

研究者番号：60611621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1930～40年代の湖南省長沙を対象にして、地方教育者らによって設立された教育機関や学術団体における、儒学普及の方針および方法に関する文献史料を収集した。また、同時に学校教育を受けた経験がある者に対して聞き取り調査をおこない、学校教育における儒学教育の内容および教員の教授法に関する多くの情報を得た。これらの文献史料や情報を分析し、中国近代の学校教育における儒学の普及と継承に関する研究を進展させる手がかりを得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The focus here is on the educational institutions and academic organizations of Hunan Changsha. I analyze not only various historical documents relating to educational policy in the 1930s and 40s, but also the interviews I have conducted of people who studied at these schools during the same time period. Through the evidence that I have collected, I will demonstrate the spread of Confucianism in school education in Modern China.

研究分野：教育史

キーワード：中国 近代 教育史 儒学

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年来、中国大陸では富裕層を中心に、エリート教育としての儒学經典の暗誦(「児童經典誦読工程」)が提唱され、学校教育において儒学經典を教授することの是非を問う論説が急激に数を増している。これを受けて日本では、次世代の中国エリート像を把握するうえで、中国現代の学校教育における儒学普及の実態を解明することが重要な課題となっている。これを解明するため、申請者は歴史学的アプローチとして、「前近代の儒学教育と比較した場合、中国近現代において儒学教育のあり方にどのような変化が生じたか、またその要因は何か」という課題を設定した。

(2) 中国近現代において、学校教育における儒学普及が中国教育界のあいだで提唱された時期は、清末民初期(1902-16年)、南京国民政府期(1930-40年代)、現代(2000年代)の三期に分けられる。うち、儒学教育の歴史の変遷を考察する際、清末と現代を繋ぐうえで重要となる1930-40年代に関する研究は、国内外ともに僅少というのが現状である。

(3) 申請者はこれまで中国近代の湖南省長沙における教育界を対象に研究を進めてきた。近年、清末・民国期の主要な地方教育者の教育活動を明らかにし、彼らが1930年代においても同地の教育を主導していることを明らかにした。また、清末・民国期に湖南省長沙の学術団体が発行した地方教育雑誌を検討し、1930-40年代の湖南省長沙では儒学教育が積極的に実践されているという見通しを得た。

(4) 従来の教育史研究に共通する問題点として、学校教育の被教育者は基本的に文献史料を残さないため、被教育者から見た教育実態が明らかにできないことが挙げられる。この問題を解決するにあたり、申請者は文化人類学的手法を用いることが効果的であると考えた。同時に、1930-40年代に学校教育を受けた者はいずれも極めて高齢であり、したがって彼らに対する聞き取り調査は数年後には不可能となる見込みが極めて高く、本研究の開始は一刻の猶予もならないことも認識した。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、1930-40年代の湖南省長沙における学校教育での儒学普及の実態を明らかにすることを通じて、中国近代における儒学の普及と継承に関する実証的研究を進展させる手がかりを得ることである。研

究期間内には次の2点を考察・解明する。いずれも1930-40年代の湖南省長沙を対象としている。

地方教育者集団によって設立された教育機関・学術団体における、当時の儒学普及の方針および方法。

当時に学校教育を受けた経験がある者の回想・口述に基づく、学校教育における儒学教育の内容、および教員の教授法。

(2) 従来の研究では、中国近代を通じて、儒学教育は学校教育外(農村に設立された私塾など)において、日本・西洋の近代教育学を受容していない伝統的知識人によって教授されるものとみなされていた。これに対して本研究は、上記を考察することにより、1930-40年代の湖南省長沙では学校教育内で、近代教育学を受容した近代的知識人としての地方教育者によって儒学が教授されたことを実証する。そしてその儒学の内容や教授法は、清末以前の単純な焼き直しではなく、学校教育に適應するよう地方教育者によって改変がなされていたこと、さらには改変に際して日本や西洋の教育学が参照されていたことを実証する。

3. 研究の方法

(1) 本研究の研究目的を達成するため、文献史料に基づくオーソドックスな歴史学的手法と、フィールドワークに基づく文化人類学的手法を併用する。具体的な研究項目は次のとおりである。いずれも1930-40年代の湖南省長沙を対象としている。

(2) 文献史料の収集 湖南図書館をはじめとする中国の各機関において、地方教育者集団によって設立された教育機関・学術団体、ならびに儒学教育・近代教育学に関する地方文献史料を収集する。

(3) フィールドワーク 文献史料の収集・分析とあわせ、当時に学校教育を受けた経験のある者をインフォーマントとして、儒学教育を受けた期間、儒学教育のテキストや内容、教員の教授法などの項目について聞き取り調査を実施する。

4. 研究成果

(1) 本研究で得られた成果は、収集した文献史料および口述記録を分析することで、1930-40年代の湖南省長沙における学校教育での儒学普及の実態の一端を明らかにすることができたことである。具体的には、次のとおりである。

(2) 湖南省の学術団体である湖南省教育会に所属する地方教育者は、学校管理法や教授法など近代教育学を受容した近代的知識人であり、ナショナリズム喚起を目的として、「国学」としての儒学教育が彼らによって提唱さ

れた。文献史料に基づくと、儒学教育の内容や教育方法は提唱する教育者によって異なるが、特徴的なのはテキストである四書五経の取捨選択がなされていたことである。すなわち、四書五経すべてを読むべきとはせず、『論語』『孟子』を中心とし、五経は節略して読むのがよい、というものであった。また、教育方法については、儒学教育は初等教育から始めるべきとされ、教授の際には従来の暗誦重視ではなく講釈による理解を重視するものであった。これは清末以来、近代教育学を受容した近代的知識人の間で議論されていたことであったが、1930-40年代には同じく近代教育学を受容した地方教育者の間で一定の認識が共有されていたことがうかがえる。

(3)また、口述記録によると、儒学教育について別の側面が看取できる。1940年代の湖南省では、周囲には小学校とともに私塾がなお多数存在しており、彼らは小学校に通う以前、まず私塾で教育を受けている。私塾では、近代教育を受けていない伝統的知識人より三字経・千字文にはじまる伝統教育を受け、この過程で『論語』『孟子』などのテキストを伝統的な暗誦中心の方法で学んでいる。その後、8-9歳で小学校に編入するが、小学校では儒学教育は行われず、中学校に進学後、国語教科書に五経の一部が採用されていたという。当時の著名な私立学校である明德学校には、当時の中等教育のテキストとして使われていたという『詩経』が残されているが、これはインフォーマントの話を裏付けるものである。以上により、地方教育者は初等教育からの儒学教育を提唱していたが、現場においては初等教育ではなく中等教育から儒学教育が採用されていた、という可能性が考えられるのである。

(4)本研究における文献史料の収集については、湖南図書館・南京図書館など中国の図書館を訪れ、1930-40年代の湖南省長沙において地方教育者集団によって設立された教育機関(『湖南省志・教育志』『湖南船山学校章程』『孔道月刊』『孔道期刊』『船山雑誌』『船山期刊』など)・学術団体(『湖南教育』『湖南教育雑誌』など)および儒学教育(『読経問題之検討』『読経問題』『読経平議』『大学広義』など)・近代教育学(『学校管理法要義』『新制学校管理法』『教育学講義』など)に関する地方文献史料を複写・撮影することができた。

(5)本研究におけるフィールドワークについては、現地協力者および通訳の助力を得て、当時に湖南省で学校教育を受けた経験のある者をインフォーマントとして複数人選定し、聞き取り調査を実施することができた。主要な質問項目は、略歴のほか、小学校入学以前、小学校、中学校以降、と時期を

区切ったうえで、それぞれの時期において受けた儒学教育のテキストや内容、教員の教授法、などである。本研究の課題設定上、インフォーマントは年齢が70歳代後半から80歳代で、その多くが学校教育を受けた後に小学校もしくは中学校の教員を務めた経験を持っており、定年退職後も引き続き学術活動に従事していることもあって、記憶力は比較的明快であった。聞き取り調査の口述記録はすべてテープ起こしを行い、文字化して整理した。

(6)本研究によって得られた成果の国内外における位置付けやインパクトについて、1930-40年代の中国における儒学の普及と継承に関する実態を解明するうえで、方法論において文献史料の収集とフィールドワークを併用することによって、研究の進展のための基礎的情報を得られたことが、本研究の研究史上の意義である。とくにフィールドワークによって、文献史料では得ることのできない被教育者側からの情報を得られた点は、従来の研究には見られない意義を有している。また、従来の「西洋教育学の導入と矛盾」「保守反動的な儒学教育」という枠組を脱し、近代教育学と中国伝統教育を取捨選択して融合させようとする地方教育者集団の主体的な営為を明らかにすることができた点も特色である。

(7)本研究を踏まえた今後の展望としては、次の3点があげられる。

中国近代の学校教育における儒学普及の実態に関する実証的研究を進展させるためには、湖南省における文献史料ならびに聞き取り調査の継続はもちろんのこと、湖南省以外の地域に考察対象を広げる必要がある。特に、清末以来、湖南省と並んで儒学教育が盛んであったとされる広東省の事例を蓄積することが今後重要となろう。

1930-40年代の中国における儒学教育の特徴を明らかにするうえで、比較対象として清末民初期および現代における儒学教育の特徴についても考察を深める必要がある。これにより、儒学教育の特徴の歴史的変遷を跡付け、変遷の要因を明らかにすることができよう。

従来、教育学の一分野としての教育史研究の側面において、「西洋教育学の導入と矛盾」「保守反動的な儒学教育」という中国近代教育史像が提示されているが、今後、地方教育者の主体的営為に着目することで、この像を大きく転換させ、地方教育者集団の主体的営為を中心とする新たな中国近代教育史像を描くことができよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

宮原 佳昭、近代中国における「学校管理学」について 易克ゲツ・謝冰訳『学校管理法要義』を手がかりに、2014年度広島史学研究会大会東洋史部会、2014年10月26日、広島大学東広島キャンパス(広島県東広島市)

宮原 佳昭、近代中国における日本の教育学教科書の翻訳について、アジア教育史学会 2014年度第3回定例研究会、2014年2月22日、南山大学名古屋キャンパス(愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮原 佳昭 (MIYAHARA, Yoshiaki)

南山大学・外国語学部・講師

研究者番号：60611621